



新会長就任挨拶

第 7 期廃棄物学会会長 高月 紘
(京都大学環境保全センター 教授)

廃棄物学会も創立以来 12 年目を迎え、おかげさまで会員数も 4,000 名を超え、環境分野では有数の学会に成長しました。

学会活動の内容も成長期らしく非常に幅広いものになってまいりました。しかし、学会の今後の発展を考えると、その運営方法については、中長期の展望を含め見直しの時期に来ていると思われます。そこで、今一度原点に戻って「学会とは何か?」「廃棄物学とは何か?」を考え、その上に立って当面当学会としてなすべきことを列記してみたと思います。

まず、「学会とは何か?」ですが、学会とは学問を追究する研究者の集団組織であり、会員の研究発表や情報交換の場を提供するなど、研究者の活動を支援する組織であります。したがって、当然ながら学会はいわゆる業界団体や各種の協会とは少し異なる性格をもち、廃棄物学を創造し、支える使命がある組織だと考えます。

次に「廃棄物学とは何か?」ですが、これについては会員皆それぞれ考え方が異なり、まだ定まったものではないと思われます。私見を述べさせていただきますと、一般的には学問とは真理の追究であり、すぐさま世の中に役立つものでなくてもある現象を解明したり、原理を証明するものと言われていますが、こと廃棄物学は、やはり廃棄物問題を解決するための学問というある種のミッションをもった学問と思われます。しかし、この廃棄物学の背景にある廃棄物問題は、時代とともに少しずつ変化をして来ています。すなわち、一般廃棄物や産業廃棄物を適正処理するだけにとどまらず、今や物の生産や消費にかかわる資源、エネルギー問題とリンクして、環境負荷をいかに減らし持続可能な社会を形成するかという課題としての廃棄物問題となってきました。このように考えると、当面当学会の活動目標は、次のとおりです。

1. 会員の増強

当学会の現在の領域分野や構成比は、圧倒的に廃棄物処理工学分野に限られ、業種別に見ても大学、企業が多く、行政、消費者・市民などが非常に少なく、企業の中では上流側の会員が少ないなどアンバランスの状態にあります。そこで、今後は廃棄物処理工学以外の会員、消費者・市民の会員、上流側の賛助会員などの会員増強をはかりたいと思います。

2. 支部活動の活発化

これまで、各地区で連絡会的に発展してきた組織を支部として位置付け、より積極的に地区活動を行いたいと思います。すなわち、幅広い層の会員確保と現場の意見を吸い上げるには、地域活動が欠かせません。特に、市民参加による学会活動の展開を期待したいものです。

3. 国際協力活動の推進

昨年、田中勝前会長のご努力により、岡山にて環太平洋有害廃棄物国際会議(PBC)を開催することができました。また、例年韓国の廃棄物学会とも交流を行う実績もできてきています。さらに、当学会は英文ジャーナルを発行しています。このようなことから、今後は日本からより積極的に世界に向けて廃棄物学会の存在をアピールしていきたいと思います。

4. 学会として社会に向けての発信

めまぐるしく変化する廃棄物の情勢に対し、多くの人々が廃棄物問題解決への正しい道筋を求めています。これに対し、学会として何らかの提言なり、方向性を示す必要があるのではないのでしょうか。そのために、学会内に社会に向けて発信すべき内容を検討する機能を持たせたいと思っています。

5. 法人化に向けての検討

当学会設立以来、法人化の窓口を文部科学省に求めてきたましたが、社会情勢が従来型の法人組織をこれ以上増す方向にないことから、文部科学省へのアプローチは非常に困難と言わざるを得ません。そこで、NPO(特定非営利活動団体)法人への可能性も含めて、法人化の是非を再検討するつもりです。

6. 若い会員の育成

当学会の年令構成は圧倒的に 50 歳以上が多く、これは当学会の今後の発展性を考えると憂慮すべき事態であります。理事や幹事など学会をリードすべき人々に、次世代候補を育成していくことが必要です。そのためには、各委員会委員や支部役員にできるだけ若い会員を加えるなどの配慮をしたいと思います。

以上、やや思いつくままに所信を述べさせていただきましたが、これらの課題を解決するためには、当然ながら会員皆様のさらなる理解と支援がなければできません。何卒よろしくお願いいたします。

新副会長就任挨拶



第7期廃棄物学会副会長
澤地 實
(大阪市環境事業局 施設部長)

編集委員長を2期務めさせて頂きましたが、今期は高月新会長の下で副会長・年会委員長を拝命致しました。

学会設立以来12年経過し、廃棄物問題がますます重大な社会課題になっている状況の中で、当学会をさらに充実させて社会的役割をいかに果たしていくのか、改めて身を引き締め取り組まねばと思っています。

具体的な内容については、今後新体制の中でいろいろ論議が交わされることとなりますが、今回担当することになった今年度の年会は、この11月に京都の国際会議場で開催さ

れます。思えば、阪神淡路大震災のあった平成7年の秋に神戸で年会が開催され、それを契機に、地方でも学会のポテンシャルを結集して独自の活動を行おうとの思いから関西地区連絡会を結成し、以来今日まで様々な活動を行ってまいりました。また、これ以降各地で懇話会、連絡会などが相次いで結成され、それぞれの地域で活動を展開しております。

学会活動は本部を中心とした全国的な取り組みと、各地域での活発な活動があいまって充実したものとなります。こうした観点から、今年の京都での年会を契機に関西地区連絡会を支部へと衣替えし、地区活動をさらに活発に展開したいと考えております。地域の会員の方々の積極的な参加によって地域活動を活性化し、それが学会全体の発展につながれば、と念じております。



第7期廃棄物学会副会長
田中 信壽
(北海道大学大学院工学研究科 教授)

廃棄物学会は、会員構成や研究範囲の広さという点で大きく発展し、世の中の役に立ってきた。それを更に発展させるよう努力したい。

特に、学会出版物の実現に努力したい。学会の重要な機能に、会員の知識を集めそれを広めていくことがある。これまでの学会出版図書は、「廃棄物ハンドブック」と「ごみ読本」の2冊に過ぎない。学会会員の持っている経験や知識は膨大であり、会員の活発な研究によりどんどん蓄積されている。その一方で、廃棄物の適正処理や循環型社会の姿に関し

て誤った知識や情報も氾濫しているの、体系的に整理された「知の集積」を出版し、「会員の経験」を後世代に伝えることを目指したい。

また、学会の今後のすみ方についても課題提起をしたい。廃棄物の適正処理は、不要品が排出された後の課題として、取り組まれ、研究されてきた。しかし、今や、3Rが大きな課題となり、あらゆる学会が不要品発生抑制や資源循環に取り組む時代になった。その中で廃棄物学会はどのような役割を果たすべきだろうか。

家庭や企業から排出される不要品は無くならず、3Rを含む適正処理は廃棄物学会でしか取り組めない課題である。それ故に、製品や素材のライフサイクル管理にも取り組める。この特性を生かして、資源循環を研究するすべての学会のまとめ役となることはできないだろうか。



第7期廃棄物学会副会長
藤本 忠生
(株式会社クボタ 顧問)

この度第期廃棄物学会副会長の大役を仰せつかりました。

廃棄物学会も本年は設立13年目になります。今回の大任をお受けするにつき、改めて学会設立にご尽力された諸先輩の志に思いをいたし、学会発展のために微力を尽くしたいと考えます。

この二年間、次の二つのことを頭に置いてお手伝いをしてみたいと思います。

一つは、社会が大きく変る中、廃棄物学会の重要性は

益々大きくなりつつあることです。そこで、会員の皆さんの意見を大いに聞き、役員の間でも議論を尽くし、実行すべき施策は実行に移したいと思います。その場合、「いつまでに」という時間軸を組み込んだ計画の作成をしてゆきたいと考えております。

二つ目は、学会の活動は、会員と賛助団体から預かった会費で賄われていることです。従って、この貴重な会費を「より効果的に活用するには」ということを議論する場を設け、検討する必要があります。評価に際しても、費用対効果の考えの導入は大切だと思います。しかし、効果については、効果の出る時点、効果が直接的か否かなどについて、色々な見方があるはずで、よく検討し出来るだけ共通の視点に立ておくことが必要です。

会員皆さんの声をどしどしお寄せ下さい。

平成14年5月23日

平成14年度 総会報告

同時開催：平成13年度廃棄物学会賞表彰式

平成 14 年度廃棄物学会総会は、平成 14 年 5 月 23 日に大田文化の森(東京、大田区中央)において、正会員 73 名の出席と 845 名の委任状を併せ、会則に定める定数(正会員数の 4 分の 1 以上)を越える出席数を得て開会された。

まず、田中勝会長が挨拶に立ち、学会の活動として環太平洋有害廃棄物国際会議など国際協力の推進とともに、学会の基盤強化としてアンケートによる会員意見の把握、会員増強、支部活動やホームページの充実などの取り組み、法人化の検討を報告され、併せて学会員の活躍に謝辞を述べられた。

引き続き、出席者から中明和氏が議長として満場一致で選出され、小谷克己および岡田光浩の両氏が議事録署名人として選出され、議事に入った。

まず、第 1 号議案「平成 13 年度事業報告」、第 2 号議案「平成 13 年度収支決算」が、藤本忠生総務委員長から報告され、「同監査報告書」が、伊藤喜栄監事より説明された。審議の結果、両議案とも満場一致で承認された。

次いで、第3号議案「平成14年度事業計画(案)」、第4号議案「平成14年度収支予算(案)」についても審議がおこなわれ、満場一致で両議案とも承認された。

さらに、第 5 号議案「廃棄物学会会則の一部改正」の審議および第 6 号議案「名誉会員の推薦」が、7 名のお名前とともに説明され、両案とも満場一致で承認された。

続いて、第7号議案「第7期役員選任」では、選挙の結果が報告され、理事16名および監事2名が満場一致で役員として選任された。新理事による第1回理事会開催のための休憩を挟み、議事が再開され、第8号議案「理事会推薦理事の選任」に関し、田中信壽理事から提案説明があり、新たに、浦満彦氏、中村慎一郎氏、松田仁樹氏、山本和夫氏の4名の理事が満場一致で選任された。引き続き、同理事会にお

いて、新会長として高月紘氏を、会長指名により副会長として、田中信壽氏、澤地實氏、藤本忠生氏の 3 名が選任されたことが報告され、満場の拍手が出席者から送られた。以上で総会議事はすべて終了した。

閉会に先立ち、高月紘新会長から、学会発展のため一層の会員の協力要請とともに、廃棄物学の発展、支部を含めた活動の活発化、国際協力の充実や社会に向けた提言および NPO 法人も視野に入れた取り組み、若い会員の獲得などの抱負が挨拶として述べられ、総会は無事閉会した。

短い休憩を挟み、同会場にて、平成 13 年度廃棄物学会
賞表彰式が行われ、3 件の論文賞および 1 件の奨励賞が贈
られた。

論文賞は、野間幸生氏、松藤康司氏、高田光康氏、友田啓二郎氏の「一般廃棄物最終処分場におけるダイオキシン類の収支」、平井康宏氏、村田真樹氏、酒井伸一氏、高月紘氏の「食品残渣を対象とした循環・資源化処理方式のライフサイクルアセスメント」および田崎智宏氏、小口正弘氏、亀屋隆志氏、浦野紘平氏の「使用済み耐久消費財の発生台数の予測方法」が高い評価を得て選ばれた。

また、奨励賞としては、大塚康治氏が、廃棄物対策に係る基礎調査とその解析および情報発信など一連の研究活動が、高く評価され受賞した。各氏には、田中勝会長より表彰状と記念品が授与された。なお、受賞記念講演が、本年 11 月 28 日から京都市で開催される第 13 回廃棄物学会研究発表会において予定されている。

(総務委員 河端博昭 記)

新名誉会员(敬称略)

石丸 園男 黒沢 重雄 神山 桂一 内藤 幸穂
納多 弘明 平山 直道 武藤 暢夫

第7期 理事・監事(敬称略)

会 長	高月 紘	理 事	寺田かつ子
副会長	澤地 實	〃	中村 一夫
〃	田中 信壽	〃	中村愼一郎
〃	藤本 忠生	〃	福山 大二
理 事	青山 俊介	〃	古市 徹
〃	井手 義弘	〃	松田 仁樹
〃	浦 満彦	〃	松藤 康司
〃	占部 武生	〃	山本 和夫
〃	小林 康彦	〃	横田 勇
〃	酒井 伸一	監 事	奥村 忠彦
〃	田中 勝	〃	藤原 正弘

▼ 廃棄物学会賞受賞者



平成14年度研究シンポジウム開催報告

シンポジウムテーマのうち 4 件は研究部会から出してい

来年度の研究シンポジウムも5月に開催する予定である。開催案内は早めに出すよう注意するが、定期的な開催なので会員の方々には予め年間の予定に含めていただくことをお願いします。なお、シンポジウムの詳細報告を廃棄物学会誌第13号4号に掲載予定です。そちらもご覧ください。
(年会委員会幹事 松藤敏彦 記)

韓国廃棄物学会参加報告

(国際委員会委員長 横田勇 記)

(제)한국과학기술학회 2002년도 춘계학술연구합동회 및 제 6 회 전 · 일 과학물리학 international session
 자원순환형 사회구축을 위한 대기질 개선팀 역할편의에 관한 토론회
 일시 : 2002. 5. 9 (목) 오후 1시 ~ 4시 / 장소 : 서울서립대학교 강당 제 2 기

「大地を支えるものー森と文明の行方」開催報告

平成 13 年、大阪市の港湾域に名所が二つ誕生した。一つが大阪市環境事業局舞洲(マイマ)工場で、もう一つはユニバーサル・スタジオ・ジャパンである。首記のセミナーは、その舞洲工場で、平成 14 年 4 月 20 日に開催された。

第一部は国際日本文化研究センター教授安田喜憲氏を招いての講演であった。安田氏は、湖底の泥をボーリングして採取し、そこに見られる年縞(夏と冬では色が違うので縞となる)を数えて年代を測定し、泥に含まれている花粉などを調査して当時の環境や人類の営みなどを調べる環境考古学を専攻されている。講演内容は研究成果に基づく次のような環境文明論であった。

人類は二つの文明の系譜を持っており、一つは稲作・漁労を行う植物文明を持つ「森の民」で、もう一つは畑作・牧畜を行う動物文明を持つ「家畜の民」である。家畜の民は森を破壊し尽くしては他に移動していったという歴史を持つ一方、森の民は一カ所で持続的な生活をしてきたという特徴を持つ。人類の歴史は、家畜の民が森の民を駆逐して世界に拡大したというものであるが、このような歴史の先には人類の未来はない。日本人は元来森の民であり、家畜の民の文明観を捨てて森へ回帰すべきである。

第二部では舞洲工場の施設見学が実施された。舞洲工場は、オーストリアの芸術家フンデルトヴァッサー氏のデザインによるもので、自然には直線や同一物はないという氏の観点から曲線と様々な色を用いた印象的な工場である。建設途中から人々の関心を集め、多くの見学者があるという、処理機能だけではなく情報発信の機能も持つ工場と位置づけられるユニークな工場であった。

会場の関係で参加者数を限らざるを得なかったが、約 110 名の参加を得て成功裏に終了した。

(関西地区連絡会 山本攻 記)



「廃棄物による環境リスクと循環型社会の設計」開催報告

東海・北陸地区連絡会は 4 月 23 日～24 日に国内シンポジウム「廃棄物による環境リスクと循環型社会の設計」を名古屋大学シンポジオンにおいて開催した。本シンポジウムでは 10 名の講師を招待して地球環境や人体に有害な廃棄物による環境リスクの評価と、これらの無害化・再資源化処理による循環型社会の設計指針について講演と討論を行った。

第 1 日目は、京都大学の西山孝氏による「技術文明の進展と資源・エネルギー需要」と題する講演があった。午後からは、有害化学物質のリスクアセスメントとリスク管理に関して(財)化学物質評価研究機構の宮本純之氏と(独)国立環境研究所の中杉修身氏による講演が続いた。その後、産業界のリサイクル活動について、鹿島建設(株)の塚田高明氏から「建設廃棄物による環境リスクとリサイクル」、トヨタ自動車(株)の児玉宅郎氏から「自動車産業における資源リサイクル活動」の講演が行われた。

第 2 日目は、循環型社会形成のための政策的、経済的、法的枠組みづくりに関して、名古屋大学の柳下正治氏、小川光氏、また静岡大学の恒川隆生氏による講演があった。午後は循環型社会の構築を目指して、LCA による環境影響評価手法について(独)産業技術総合研究所の稲葉敦氏の講演が、また「レスキュー・ナンバー」評価法の汚染地盤処

理技術への適用について名古屋大学の片山新太氏から講演があった。

本シンポジウムには、東海地域の大学、企業、研究機関からの研究者、学生 150 余名が参加した。循環型社会の構築に向けた適正な廃棄物処理は、文系、理系の領域を越えた学際分野であるだけに、会場では活発な質疑応答が交わされた。最後に地区連絡会の伊藤代表幹事から東海・北陸支部設立の準備状況が報告され、好評のうちに会議を終了した。

(東海北陸地区連絡会 伊藤秀章 記)



【お知らせ】

試験検査法研究部会、会員募集

当部会では平成8年から6年間、3つのサブ研究会において廃棄物の試験検査法に関する研究活動を行ってきましたが、3年ごとの見直しの中で、新たな研究課題として国際的調和・廃棄物等の共同分析・データベース化をキーワードと考えて活動することにしました。サブ研究会としては、「分析法の開発および精度管理を考える部会(仮)」と「検査法の体系を考える部会(仮)」とし、ハード(分析手法の検討)とソフト(試験検査の目的・利用と分析手法の整合性等)の両面からの切り口で扱うことにしています。研究活動を共にする意志をお持ちの方の参加をお待ち致します。お気軽にご参加ください。(部会代表 貴田晶子)

1) 申し込み方法

氏名、勤務先・所属等、連絡先、電話番号、FAX番号、E-Mailアドレス、得意分野、現在の仕事又は研究課題、ご自身のプロフィール、試験検査法研究部会に望むこと等、をご記入の上、下記までFAX又はE-Mailにてお申し込みください。

2) 申し込み先

(独)国立環境研究所 山田正人

E-Mail: myamada@nies.go.jp

TEL: 0298-50-2837、FAX: 0298-50-2016

3) 募集締め切り

平成14年7月末日

新刊紹介

『循環型社会構築への戦略』

—21世紀の環境と都市代謝システムを考える—

田中勝/田中信壽 編著

発行所: 中央法規出版株式会社 (TEL: 03-3379-3861)

定価: 3,500円(税別)

= 事務局夏季休暇 =

平成14年8月14日(水)～16日(金)

会員状況

H14.6.30現在
()内は、H14.4.1以降の増減

正会員	3,603 (136)
学生会員	274 (29)
外国人会員(DM)	21 (2)
公益会員	114 (2)
賛助会員	207 (-3)
計	4,219 (173)

注) 外国人会員(DM)は、廃棄物学会外国人等会員規程第4条に定める会員を示す。

廃棄物学会ニュース No.69

平成14年7月10日発行

〒108-0014 東京都港区芝5-1-9 豊前ビル5F

Tel. 03-3769-5099 Fax. 03-3769-1492

http://www.jsme.gr.jp

古紙配合率100%再生紙を使用しています



北海道大学大学院に

「循環資源評価学講座」が開設

本年度から5ヵ年の予定で、北海道大学大学院工学研究科に循環型資源評価学講座が開設されました。

本講座は、循環資源や環境影響の評価など循環型社会の構築に向けて重要な課題を研究するもので、随時開催されるセミナーは、広く一般に公開されます。

問合せ先: 北海道大学大学院工学研究科

環境資源工学専攻

循環資源評価学(タクマ)講座

TEL: 011-706-7298

○統計数理研究所主催

環境科学と統計科学の新たな融合

- 環境科学は統計科学に何を期待するか、

統計科学は環境科学に何ができるか -

開催日時: 平成14年8月19日(月)～20日(火)

開催場所: 統計数理研究所・講堂

(東京都港区南麻布4-6-7)

参加費: 無料(下記HPより事前参加登録可能)

連絡先: 金藤浩司(統計数理研究所)

E-Mail: ismsympo-environment@ism.ac.jp

HP: http://www.ism.ac.jp/ismsympo-environment/

○科学技術振興事業団主催

「環境研究の最前線」

- 環境低負荷・資源循環への挑戦 -

- 科学技術振興事業団 第7回基礎研究報告会 -

開催日時: 平成14年9月6日(金) 10:00～16:30

開催場所: 京都サウスパーク西地区サイエンスビル4号館

(京都市下京区中堂寺南町17番地)

参加費: 無料(参加希望者は事前申込をお願いします。)

TEL: 03-3831-5911、FAX: 03-3831-7702

E-Mail: kisoken@jarec.or.jp

HP: http://www.jst.go.jp/jst/kiso7.html

事務局だより

日韓代表の活躍に熱くなったW杯も終わり、暑い夏を迎えようとしています。

さて、私はこの4月から学会の事務局でお世話になることとなりました。実際に事務局を訪れるまでは、まさか4,000人余りの会員を抱える廃棄物学会の事務局が、局長を含め、たった3人のスタッフで運営されていたとは夢にも思いませんでした。そんな小さな事務局では、今、11月の研究発表会の準備、会員名簿7号の作成などに忙しい毎日を送っております。すべてが初めての私には、前任の方々の作成されたマニュアルと会員の方々、事務局のスタッフからの助言が頼りの毎日です。至らぬ点多いかと思います。お気付きのことがございましたら、是非、アドバイスを頂きたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

(廃棄物学会事務局 伊藤香織)